



Data

監督・脚本：武正晴
 原作：中村文則『銃』（河出書房新社）
 出演：村上虹郎／広瀬アリス／日南響子／新垣里沙／岡山天音／後藤淳平（ジャルジャル）／中村有志／日向丈／片山萌美／寺十吾／サヘル・ローズ／山中秀樹／村上淳／リリー・フランキー

👁️👁️ みどころ

ある日、偶然、拳銃を拾ったら・・・？世界一安全な法治国家で、豊臣秀吉譲りの（？）「銃砲刀剣類所持等取締法」がある日本では、そんな事態は現実にはありえないが、小説なら可能。そんな一人称で語られる中村文則の処女小説が映画化。

主人公トオルのモノローグを軸に展開していく物語は、一方では若者の成長の過程だが、他方では狂気のプロセスを・・・。家にある→持ち歩く→撃ってみる。欲望がそんな風に次第に変化していくと、さてその次は・・・？

ドストエフスキーの『罪と罰』とは比べるべくもないが、今どきの大学生の拳銃の拾得を契機とした、成長と狂気の物語は興味深い。こりゃ、法学部でも、『シネマから学ぶ法律』のいい教材になるのでは・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□ある日、偶然、拳銃を拾ったら・・・？■□

本作は芥川賞作家・中村文則の同名処女小説を、『百円の恋』（14年）『シネマ 35』186頁『嘘八百』（17年）『シネマ 41』72頁）の武正晴監督が映画化したもの。テーマは「ある日、偶然、拳銃を拾ったら・・・？」というものだ。冒頭、スクリーン上には雨が降る中、河原にポツンと落ちている拳銃らしきものがクローズアップで映し出されていく。汚れているのでわかりにくいですが、アップが進むと、それが銀色の拳銃であることがハッキリわかってくる。

もし、あなたがある日、偶然、拳銃を拾ったら・・・？日本には「銃砲刀剣類所持等取締法」があるから、許可なしに“銃砲刀剣類”を所持することは禁止されている。また、

同法は「発見及び拾得の届出」を定めているから、ある日、偶然それを拾ったら、それを警察に届け出なければならぬ。本作でそれを拾ったのは大学生のトオル（村上虹郎）だから、いくら今ドキの日本人学生の知的レベルが落ちたといっても、それくらいのことには知っているはずだ。ところが、トオルには全くそんな気はないようで、それを一人暮らしのアパートに持って帰ると、宝物のように磨いて箱の中にしまい込んだからアレ……。それは一体なぜ？また、彼の知的レベルと精神構造は一体どうなってるの？

本作では、そんな主人公の心理をモノローグ（告白）の形でチラホラと観客に示しながらストーリーが進行していくが、なぜトオルは偶然拾った拳銃でこんなに精神が高揚するの？それが本作のテーマだが、今ドキの平和で豊かな時代の若者（大学生）であるあなたなら、こんな場合どうする……？

■□■今ドキの大学生の実態はこんなもの……■□■

私が大学時代に一人暮らしをしていたアパートは8畳ぐらいあったから、比較的広い方。ある友人は、大学の4年間ずっと3畳一間のアパートに住んでいた。それに比べると、本作の東京の大学に通っているトオルの部屋は木造2階建ての古いアパートだが、6畳二間ぐらいあるから、かなり贅沢。もともと、安物の木造アパートの特徴である隣との壁の薄さは昔と同じで、隣からは時々母親がヒステリックな声で子供を叱りつける（虐待する）声が聞こえてくるのは、うっとうしそうだ。それでもトオルは当然のようにかなり立派なステレオ装置を持っていたから、隣がやかましい時はこちらも音量を大きくして「対抗」していた。したがって薄壁1枚隔てて隣同士に住む貧乏学生と貧乏母子家庭の間には“ほどよいバランス”が保たれていたが……。

他方、昼間のキャンパスに見るトオルの大学生活は、女好きであくまで陽気な友人ケイスケ（岡山天音）と適当に遊びながら、授業にもそれなりに出席しているらしい。また、時々かかってくる両親からの電話にも楽しそうに対応していたから、立派なもの。もともと、それにも後述のようなウラ事情があったが……。

また、ケイスケと合コンを企画した夜は当然のようにそのまま一夜のアヴァンチュールを楽しんでいたから、トオルの大学生活はそれなりに“充実”しているらしい。もともと、トオルの顔を見ていると、授業はもちろん、合コンもセックスもあまり興味なさそうだったが、今ドキの大学生の実態はこんなもの……。

■□■トオルの気持ちの変化に注目！この自信はどこから？■□■

合コンの後にしげこんだ女の家は立派なマンションで、彼氏もいるようだったが、時々秘密の出会いだけならOKらしい。また、この女は意外に世話好きで、朝はトーストとコーヒーを用意してくれたから、トオルはこの女を“トースト女”（日南響子）と名付け、以降時々セックスフレンドとして活用することに……。

他方、ある日授業中に出会ったちょっと知的でワガママそうな帰国子女のヨシカワユウコ（広瀬アリス）に出会うと、こちらは“トースト女”のようなセックスフレンドにするのではなく、あえて時間をかけて親しくなることを計画し、いわば“恋愛ゲーム”の対象女に設定。なるほど、なるほど。

ところで、これまでは全く味気なさそうだったトオルの大学生活や女関係がこのように急に充実してきた（？）のは、一体なぜ？それはどうもトオルの内心に自信が生まれてきたためらしい。そして、それは、あくまで外には言えない秘密ながら、拳銃を持つことになったかららしい。彼のモノローグを聞いていると、それがよくわかるが、それって一体なぜ？それについては、映画では観客が一人一人自分で考えるしかないが、新潮新人賞を受賞した中村文則のデビュー作である原作を読めば、その心理が詳しく書かれているらしい。そこで、ネットを調べてみると、小説のネタバレ情報のサイトがあり、それを読んでみると、なるほど、なるほど。かなり詳しくトオルの心理状態が書かれているので、よくわかる。しかし、拳銃を拾っただけでトオルがこんなに変化していく、別の言い方をすればその設定だけで小説が書けるというのは、やっぱり主人公のトオルという若者がもともとかなり変な男だから・・・？

■□■家にある→持ち歩く→撃ってみる。欲望は次第に・・・■□■

日本では、拾った拳銃を届け出ないで家の中に持っているだけで罪になるが、そこにとどまれば、具体的な被害の発生はない。しかし、拳銃でこめかみを撃たれた（撃った？）遺体が発見されたにもかかわらず、その近くで拳銃が発見されないため警察が捜査しているというニュースがTVで流れていたのだから、トオルが拾った拳銃はその拳銃である可能性が高い。しかも、その拳銃には実弾が4発も入っていたから、たとえトオルがその拳銃を使わずに家の中にしまっておくだけでも、その事件が殺人事件かそれとも自殺事件か等の解明に支障をきたすことは明らかだ。

その意味において、トオルの拳銃の拾得と届け出義務の不履行の反社会性（＝犯罪性）は、いくら実害がないといってもかなり高い。そのことは誰でも明確にわかることだが、本作がそれ以上に興味深いのは、トオルの欲望が変化していくこと。つまり、トオルはしばらくの間は拳銃を家の中に持っていることだけで満足し、自分に自信を持ち、女性観を含めた（中心とした？）人生観も大きく変わっていったのだが、しばらくすると、それを持ち歩きたいと願うようになったらしい。つまり、拳銃を家の中に持っていることだけでは満足できず、より大きな満足感を得るためには持ち歩くという行為が必要になってきたわけだ。すると、トオルのその次の欲望は？きつと、それは拳銃を撃つてみたいということだろう。

しかして、ある日トオルが、夜の公園で大けがを負って死にかけている猫を見つける・・・。目と目を合わせると、その猫はいかに「早く楽になりたい」と訴えている様

子。それなら、俺が……。もし、そこでトオルが拳銃でその猫を殺したら、これは立派な犯罪だが……。

■□■刑事との“対話”は秀逸！その緊張感に注目！■□■

是枝裕和監督の『万引き家族』（18年）（『シネマ42』10頁）で、一家の支柱役としての存在感を存分に発揮していた俳優リー・フランキーは、どんな役でもこなす万能役者だが、本作ではある疑惑をもってトオルを問い詰め、追い詰める、ちょっと変わった刑事役として登場し、ストーリー形成上大きな役割を果たしているため、その緊張感に注目！

いきなりアパートを訪れて強引に家の中に入ろうとしたり、それが無理だとわかると今度は強引に喫茶店に連れ出そうとする“刑事”の“やり方”を見ていると、トオルならずとも「こいつは本物の刑事？」と疑ってしまうのは当然。また、普通刑事は2人のコンビで動くものだが、本作では一人だけだ。「死んだ猫の中からあの遺体と同じ弾丸が発見された」だって……。『発射音の後、白いコートを着て右手をポケットにつこんだ若い男が、急いで走っていくのを見た人がいる』だって……。今ドキの普通の大学生なら、突然やって来た刑事からそんな話を聞かされると動揺してボロを出すはずだが、その点トオルはしたたかで、ボロを出さないから偉い。家の中に入れるのを頑強に拒んだのも、法学部の学生でないことを考えればお見事だ。

喫茶店に入ると、刑事は当然のように“ブレンド2つ”と注文したが、こんな場合、コーヒー代は当然刑事が払ってくれるの？それを確認しないままトオルがコーヒーを飲んだのはいささか不注意だが、刑事の言うことにいちいち質問したり、反論したりしないところも偉い。また、刑事が一方的にしゃべる（推測する）事実（見立て）に対して、「でも、証拠がないでしょう」と切り返すのもお見事だ。他方、なかなかボロを出さないトオルに対して刑事は内心困っていたはずだが、「でも、証拠がないでしょう？」の指摘に対して、「証拠ならあります」、「あなたの態度ですよ。間違いありません。あなたは拳銃を持っていますよ。私はもう、確信しましたよ。」と言うのは全くナンセンス。そんなものが証拠になるはずがないのは、法学部の学生でなくともわかるはずだ。

■□■議論は勝ち！しかし、このセリフの影響力は？■□■

2人の会話は緊張感でいっぱいだったが、ここまでくると、トオルの勝利は明らかだ。ところが、その後で刑事は「あなたは次に人間を撃ちたいと思っているはずだ。」といらざる推測を述べたうえ、さらに、「銃を渡すのが嫌なら、どこかに捨ててしまいなさい。」といらざる忠告をしたが、これは明らかにやりすぎ。ここまで言われると、トオルはこの刑事の上司に文句を言うこともできるはずだ。しかも、この刑事は2人のコーヒー代を払わないまま先に喫茶店を出て行ってしまったから、アレレ……。

もともと、2人分のコーヒー代だけでコトが収まったのはトオルにとってもラッキーだ

った。刑事が言うように、拳銃を分解して処分してしまうかどうかはともかく、トオルはこれからしばらくは行動を監視されているかもしれないと考えて、拳銃を持ち歩くことを自粛しなければ。ましてや、刑事が言っていたように、人を撃ちたいという願望は封印してしまわなければ。それなのに、トオルはこの刑事との“議論”には勝ったものの、いらざる刑事のセリフの影響がずっと頭の中に残ることになったから、ちょっとヤバそう…。

■□■人を撃ちたい！そんな欲望の処理は？ターゲットは？■□■

「猫を撃ったということは、次は人間です」、「次は人間を撃ちたいと思っているでしょう」、あの刑事は確かにそう言ったが、そんなバカな。俺はそんなことは思っていないよ。あの刑事との“深遠な哲学論争”とも言えるような会話（取調べ？）を終えたトオルは、自分ではそう考えていたつもりだが、実は・・・？あの拳銃で俺が人を撃ちたいって？そんな欲望が俺にホントにあるの？もしそんな欲望があったら、そのターゲットは？そう考えると、いた、いた。格好のターゲットが！それは、まさに隣の部屋で子供を虐待している、あのバカ女だ。

本作を鑑賞した直後には「クレージーハロウィーン事件」と呼ばれていた、ハロウィーン前の週末の10月28日に、東京渋谷区のセンター街で軽トラックが横転させられた事件で、車の上で踊るなど乱痴気騒ぎをしていた暴徒たちが逮捕された。その決め手になったのが防犯カメラだが、早速12月7日付産経抄は「あなたは監視されている」と批判していた朝日新聞を批判するべく、防犯カメラの効用を力説していた。車体の上ではしゃぐ若者（暴徒）達の姿はまさに「狂態」だが、本当は気の小さな彼らをそんな行動に走らせたのは、酒の勢いもあったのかもしれないが、メインは、「集団心理」というヤツだ。それに対して、どうしようもない大学生活を送っていたトオルが急に自信を持ち始め、猫を射殺するほど大胆になったのは、「俺は拳銃を持っている」という自信のためだ。

しかして、トオルはあの刑事の言葉通り、隣の部屋のバカ女を射殺のターゲットと定めて計画を練り、遂にある日、引き金を引く寸前までに至ったが、さて、その結末は・・・？本作のハイライトたるそのシークエンスは、あなた自身の目でしっかりと。

■□■やっぱりダメ！そう思っていると更にあっと驚く結末が■□■

クライマックスのシークエンスで、トオルは引き金を引くの？それとも引かないの？その点について、私は一人で賭けをしていたが、その結末は私の予想どおりだった。ちなみに、ドストエフスキーの『罪と罰』では、ラスコーリニコフ青年は自分の哲学（主義主張）に沿った行動をとったから立派だし、そのために同作は世界トップの文学作品になったわけだ。しかし、今どきのどこにでもいるような大学生が、たまたま拳銃を拾ったくらいでホントに人を殺すことを正当化する哲学を構築し、精神的にラスコーリニコフの境地まで到達できるの？そりゃ、とてもムリだろう。ついついネタバレになるところまで書いてし

まったが、本作が面白いのは、そんな結末にトオルが落ち込んでしまうのではなく、逆に元気になってくることだ。それは、一体なぜ？それを理解するためには、原作に直接あたるしかないが、その心理描写はお見事だ。

しかして、トオルはやっとあの刑事が言っていたとおり拳銃を捨ててしまう境地に至ったらしい。そんな目的である日トオルが電車に乗ると、たまたま隣の空いた席にガラの悪いおっさんが座り、クソえらそうに携帯でしゃべり始めたから、アレレ。それまでの気の弱いトオルなら、こんな時は黙って自分の席を移っていたはずだが、なぜかこの日はカッコ良くおっさんの携帯を取り上げて捨ててしまったから、すごい。当然このおっさんは怒り始めたが、そこでトオルが立ち上がってポケットから出した拳銃をおっさんの口元につきつけると・・・？あっと驚くこの本作第2のクライマックスも、あなた自身の目でしっかりと。さあ、そこでトオルは拳銃の引き金を引いたの？それとも・・・？

2018（平成30）年12月10日記